５－０４	様式３

主題	「清拭車を無くした排泄ケア」導入の実践から見えた チームケアを良い方向に導くための条件
副題	変えた方が良いのはわかっているけど、変えられない…という 組織の方にお伝えする。組織変革の方法

チームアプローチ	排泄ケア	研究期間	12 か月

事業所	社会福祉法人養和会　特別養護老人ホーム　第二八丈老人ホーム
発表者：畑見　学（はたみ　まなぶ）	アドバイザー：石井　章浩（いしい　あきひろ）
共同研究者：山田義文/菊池志津子/廣江真美/岡野しおり/浅沼真穂/下條祐二/山下賢治	

電　話	04996-2-0770	E-mail	yowakai@smile.ocn.ne.jp
ＦＡＸ	04996-2-0432	ＵＲＬ	http://www17.ocn.ne.jp/~yowakai/

今回発表の事業所やサービスの紹介	八丈町は東京の南方海上 291 ㎞に位置し、交通の便も良く、海洋性気候により、生活がしやすい島である。人口は 8000 人程度で、島内の高齢化率は 32.5%と高い。入所サービスを担っているのは当施設のみであり、重度介助者が多く、多くの利用者が内科的疾患も合併している。当施設は離島という環境下で新たな知識を得にくい中、島内の住民・他事業所に向けての勉強会等を開催し、介護の知識・技術向上を目指している。

《1．研究前の状況と課題》

当特別養護老人ホーム（以下：当施設）Ａ館、Ｂ館ともに平成 25 年２月から３月にかけてノロウィルスに罹患する利用者様が 6～7 割となってしまった。それを受けて感染予防対策委員会から当施設において、いくつかの感染予防対策を実施する必要性を提起された。

その中の１つとして、紙パンツやパッド、清拭タオル等をまとめて運ぶカート（以下：清拭車）の使用が、感染症の拡大につながったのではないかとの推定から、「清拭車を使わない排泄ケア」という改善策が提案された。

感染症が拡大した平成 25 年２月以前も、清拭車を無くした排泄ケアを行っていこうという意見はあった。その中でも、清拭車を使用することがこれまでの習慣となっており、また使用した方が便利ではないかという声も多く、清拭車を使わないという排泄ケアの抜本的変化には至らない状態であった。

《2．研究の目標と期待する成果・目的》

本研究の得るべき結果としては、「清拭車を無くした状態での排泄ケア」を考えた。本研究では、それだけではなく、どこの施設でも存在すると思われる「変えた方が良いとわかっているが、これまでの習慣・慣習から変化させにくいケア・業務」を変えるのに必要な要素や手順は何かについて考察できるように以下のように研究を行った。

当施設はＡ館、Ｂ館とも 50 床毎で分かれており、職員数自体もほぼ同じである。その両館において清拭車を無くした排泄ケアの導入という観点から、両館の状態を記録することで、後日その違いを判断できるようにした。

これらの過程を通して①清拭車を無くした排泄ケアができるようになること②元々の組織の習慣はほぼ同様である両館で比較していくことにより、「良いとわかっているが、変えられないケア」を変えていく条件・手順について推察できることを期待する成果・目的とした。

《3．具体的な取り組みの内容》

Ａ館、Ｂ館とも、平成 25 年３月のノロウィルスの蔓延が終息以後、感染予防対策委員会において予防対策の１つとして「清拭車を使わない排泄ケア」が掲げられた。

Ａ館においては、清拭車を使わない排泄ケアの導入の優先順位を高く設定し、導入手順について検討した。これまで清拭車を使わないという話が会議等で挙がることはあったものの、なかなか導入できていない過去を振り返り、次のような手順で行った。

平成 25 年４月から８月程度の期間は、感染予防対策として有効、排泄物の臭いが抑えられるなど、清拭車を使わないメリットを様々な角度からＡ館職員に伝達していくこと。９月から 11 月にかけて理解および協力体制を得られた数人の職員と共に、通常の業務の際に清拭車を使わない排泄ケアを実際にやってみて、それまで考えていたほど負担が増えないことをＡ館職員へと伝えていくこと。そして感染症対策の意識、危機感が高まってくる 12 月に清拭車を実際に無くした排泄ケアを導入した。

Ｂ館においては、定期的に感染予防対策委員会からの情報提供はあったものの、清拭車を使わない排泄ケア以外に優先順位の高い課題があったため、Ａ館のような活動は行っていなかった。

《4．取り組みの結果と考察》

Ａ館においては、12 月に清拭車を使わない排泄ケアを導入後、若干の「以前の方が良いのではないか」という意見が出たものの、大多数の職員が清拭車を使わないメリットや、それほど負担は増えない事を理解していたため、そのまま清拭車を使わないケアが継続された。Ｂ館においても「12月の段階で清拭車を使わない方がいいよね」という意見はあったものの、実際に導入には至らなかった。

その結果、前年度平成 25 年 12 月～平成 26 年３月にかけて、Ａ館においてノロウィルスの蔓延は予防できた。

《5．まとめ、結論》

本研究より「良いとわかっているが、変えられないケア」を変えていく条件および手順としては、具体的取り組みの欄で挙げたように①理由づけ：なぜ行う必要があるのか（その理由は何か）を様々な切り口から伝えていく事②実際にやってみせること：数人単位の職員から実際にやってみることで、大変だと思っていた事がそれほどでもないこと③タイミング：本研究でいえば実際に感染症が蔓延する可能性が高くなる 12 月というタイミングで導入を実施したこと、この３点が重要になることが推察された。

なお本研究の発表者の１人は平成 26 年４月よりＢ館に異動し、実際に本研究のコンセプトを活用して、実際にＢ館における「清拭車」を使わない排泄ケア導入を行っている。現在進行中であるが、その効果・結果も本研究と同様に導入成功の方向で進んでいる。

《6．倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に確認をとり本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。加えて発表データは個人が特定できないようにデータ処理を行った。

《7．参考文献》

特になし

《8．提案と発信》

皆様の施設でも「良いとわかっているが、変えられないケア」を変えていくという事には頭を悩ませることもあるのではないでしょうか？

本研究では本抄録では伝えきれない、より具体的な手段・方法をお伝えすることで、皆様の施設の変えたい習慣や組織文化を刷新する事にご協力できれば幸いです。

【メモ欄】